モンスターハンター　　孤独な強者

究極の混沌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　孤独な強者

【Ｎコード】
Ｎ６９０６Ｓ

【作者名】
究極の混沌

【あらすじ】
あるところに、たった１匹しかいない竜がいた。
その竜は、忌み嫌われいつも孤独だった。
これはそんな竜の物語

プロローグ（前書き）

更新が遅いことがよくあります

プロローグ

俺は初めから一人だ。

誰が生んだのかわからず、

どこを探しても同族は居ない。

似たようなものは見かけるが、それでも違う。

俺の姿を見た者は、竜も人もその目は恐怖に染まっていた。

そしてガキの頃からすでに成体の竜と渡り合う力を持っていた。

襲ってくるものは蹴散らし、助けを求めるものには手を差し伸べたこともある。

だが、結局周りはその強大な力を恐れるだけだった。

故に、誰も俺に歩み寄るものは居なく、

俺はただ孤独だった。

第1話

孤島・・・

「ぐおおおおおおおおおおおお！」

「がああああああああああああ！」

浜辺で2頭の竜が争っていた。

一匹目はリオレウス　　もう一匹はラギアクルスというモンスターだ。

レウスは空から火球を吐いたり足の鉤爪で攻撃をしている。

ラギアは海に潜ったり頭を出して雷の球を打ち出している。

そして、それから２０分くらいたったころ。

１つの影がそばに降り立った。

２頭はその正体を見たとき、両者の目には絶望が浮かんでいた。

なぜなら・・・・・

「グルルルルル・・・・」

そこには、死の権化とよばれるモノがいたからだ。

「◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆！！！！」

ドンドルマ

「おいまたあれが出たらしいぜ。」

「おいおい、最近多くないか？」

「確かに、少し前はあまり聞かなかったのにな。」

酒場のハンターたちが口々にいっていると

「ねえ、さっきから話しているアレって何？」

キリン装備の少女が聞いてきた。

「ああ？おまえさんしらないのか？」

「あはは・・・最近こっちに来たばっかかなんで。」

「そうかい。俺らが話しているんは死の権化のことさ。」

「死の権化？」

「正式名称　ミラ・カオス。　何年か前に発見された新種さ。簡単に言えば、翼が黒くて白いミラ・バルカンといったところだ。向こうから仕掛けてくることは基本的にないんだが、敵意を見せると容赦がないらしい。」

「らしいということは、もうだれか戦ったんですか？」

「正確には偶然通ったハンターが見かけたらしい。そのときはティガレックスと向かい合っていてティガが飛び出したと思ったら次の瞬間血飛沫《ちしぶき》をあげて死んでいたんだと。あと今まで奴と戦って帰ってきたやつは居ねえ。だから死の権化って呼んでんだ」

「へ～」

「で、近くにいたポポには手を出さずにどこかに行ってしまったんだと。」

「なかなか興味深いですね。」

「ま、こっちから手を出さなけりゃなんもしてこねぇから見かけてもてを出さんようにしろよ。」

「わかりました。いろいろ勉強になりました。それでは。」

少女はそのままどこかに行ってしまった。

「・・・・・ふう。しかし、

く。」

人間の振りをするのも大変だよ。まった

人物（竜）紹介（前書き）

登場人物の説明です

人物（竜）紹介

ミラ・カオス　人間時はテラ

今作の主人公。
背中に黒い翼と背中から尻尾にかけて棘がある。
１本だけ長い角があり、右目の色が金色で左は赤い。ミラ・ルーツ
１０匹分の戦闘力を持つ。
使う攻撃の中には大地一面を吹き飛ばすものがある。
あまり戦いを好まないため自分から手を出すことは極端にない。
しかし、襲ってくるものは容赦なく殺しにかかる。
怒ると体に黒いラインが現れ、黒い雷をまとう。

使用攻撃
パルスドライブ
バウンドボイスの声を口の中で圧縮し放つ。ソニックブラストに似ているが威力が桁違い。
前方に放つこともでき、全方位に放つことも可能。（この場合少し威力が下がるが、それでもかなり強い）

獄炎の衣
自分の吐く黒炎をまとう。

斬波
斬撃を飛ばす。　腕や尻尾を振った時に使用

その他ミラ種の攻撃
人のとき

顔は中の上。　銀髪で目は竜と一緒。
基本ルーツZなのであまり顔を出さない。武器は真・黒龍銃槍
金を稼ぐためにハンター業を営んでいる。一人のときは竜化して戦うことが多い。
かなりの実力があり人の姿で黒龍を討伐できる。（ルーツやバルカンは無理だった）

リオン
1話で出てきた少女。
銀髪で青い目をしてる上位ハンター
性格はほがらかであがるとすぐにパニクッテしまう。何もない所でこける時がある。（いわゆるドジッ子）
いつもキリン装備で武器は召雷剣【麒麟王】
一様ヒロイン（一様はうまくできるかわからないため・・・・・作者が）

人物（竜）紹介（後書き）

紹介してみたけど主人公がチートすぎる

第3話（前書き）

これとは別にもう一つ書いてるんですが全然進めなくなってしまった。
いわゆるマンネリですかね？

第3話

とある廃村

すー　すー
1匹の竜が寝息を立てて寝ていた。

「いたぞ．．．」
「おい、ほんとに行く気か？」
「けどあれをやりゃ名誉は俺のもんだ。」
「はぁ、俺死んだな．．．」

こそこそと2人が竜の頭に近づき

「いくぞ」
「わかったよ」

「「せーの！！」」
二人は同時に大剣を振り下ろした。

ふつうならこれで死ぬかもしれないだが、

「．．．．．．．．．ぐお？」

混沌《カオス》は死なない。

ｓａｉｄ　カオス

ん～あ～もう食えん・・・

ガツン！

・・・・・・・あ？

「・・・・・・・・ぐお？」

ダレダ？オレノキチョウナスイミンヲジャマシタノハ？

こいつらか、１人はなんか足ががくがくしてるしもう１人は、・・・・

・オレオワタ＼（＾０＾）／っていうかおしてんな・・・・

まあいいや。手出ししたのこいつらだし、腹減ったし。

「ぐるるるるるるる・・・」

いただきマース

「ぐがあああああああああああああ」

「ぎゃあああああああああ」

「俺オワタ・・・（泣）」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

さって飯も終わったし運動しに行くかな。
竜はどこかに飛び去って行った。

ところ変わって雪山
ｓａｉｄ　リオン
「あはは・・・こりゃやばいかも。」
私は緊急クエストで異常震域に来ている。
１匹は何とか仕留めたんだけど、すでにかなりボロボロだった。
そこからいきなりもう一匹が待ってましたと言わんばかりに出てきた。
まだ回復してないのに・・・・
「ぐるるるるる」
やばいやばいやばいあば・・・・　間違えたってそんな場合じゃなかった。
「ぎゃあああああ！」
こっちに突進してきた！？　ど、どどどどうしよ！？私は目をつ

ぶった。

ズドン！「グガア！？」

・・・・・え？

衝撃は感じられず、わたしは不思議に思って目を開けると、私とティガレックスの間にその竜がいた。

ｓａｉｄ　カオス

食後の運動はいいもんだな～

おれはハンターを食った後雪山辺りを飛んでいた。すると

「ぐるるるる」

と言う唸り声が聞こえた。

「ん？あっちのほうか。」

聞こえたほうに飛んで行ったら、このまえの少女が襲われていた。

「こりゃ危ないな。」

とりあえず助けることにした。一応人として過ごす時があるから女の子を見殺しにするのは気が引けるし後味が悪いしな。

ずどん！「グガア！？」

はっはっは　いい気味だぜまったく女の子を襲うからこうなるのだ。
少女は驚愕の目でこっち見てるがまあいい。おれの運動相手兼サンドバック決定だぁぁぁぁ。

ｓａｉｄ　リオン
今私の前ですごい戦いが起こっている。

「ぎゅあああああああ」
ティガはヒット&アウェイでダメージを与えようとするが、
「があ」

ヒュン！　ズバア！！

「ぐぎゃあ！？」

全く効いておらず、それどころか逆に追い詰められている。カオスは腕を振っているだけだ。
それだけでティガを追い詰めている。あまりにも圧倒的だった。

「グおおおおお」

するとカオスは口を開けて上を向いた。

「え、なにあれ！？」

カオスの口元が歪んで見えるのだ。アレが何かはわからないけど本能が危険だと叫んでくる。

「▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼！！！！！！！！」

次の瞬間、ティガに向かって吠えたと思ったらティガの体が傷だらけになっていき吹き飛んだ。

「ぐ、がぁ・・・・・・」

どうやら力尽きたようだ。するとカオスが私のほうによってきた。私はやられると思った。でも私のほうを見るとこしのあたりを探り始めた。
するとポーチからなにかの瓶をとりだした。・・・・・・ポーチ？
え？なんで竜がポーチなんか持ってるの！？
そしたら瓶を差し出してきた。飲めってことかな？

「んぐっ。・・・・あれ？」
傷が全部なくなっていた。竜はそれを確認するとどこかに言ってしまった。
なんだったんだろ？

ｓａｉｄ　カオス
さてと、屑もかたずけたし少女はどういう状態なんだ？
・・・・ふむ。結構ひどいな。
たしかポーチにいにしえの秘薬がはいった瓶があったはずだけど・・・あ、あったあった。
なんかあり得ないものを見たような目でこっち見てるぞ。
とりあえず俺はその瓶を差し出すと少女は受け取ってなんでくれた。
傷は治ったようだし、これでお暇しますか。
俺はそのまますにもどっていった。

第４話

ｓａｉｄ　テラ（カオス）
え～俺は今ドンドルマに来ている。なぜかって？
銭を稼ぐために決まってんだろーが。巣にばかりいたらバカどもが襲ってくるんだもん。
いちいち相手にするのめんどいし、たまにこっちで過ごしている。
ちなみに俺はＧ級ハンターだ。　ボレアスまでならこの姿で行けるぜ。・・・まあ、バルとルーは途中で竜化したからノーカンだな。

「う～んあんまいいのないな」

「う～んこの前のはなんだったんだろ？」

ん？あれは・・・ああ、この前のキリン娘か。

「おう、どした？」

「え？ああこの前の、え～と。」

「テラだ。Ｇ級ハンターしてる。」

「リオンです。上位ハンターです。」

「で？どうしたんだ？」

「ああ、この前ティがレックス２頭に行ったときなんですが、２頭目が来たときにあの竜が助けてくれたんです。」

「なるほどな、久々にきいたなそれ。」

「？　以前もこんなことがあったんですか？」

「極稀だけどな、なぜかモンスターなのにハンターを助けてくれんだ」

「なんかすごく詳しいですね。まるで本人・・じゃなくて本竜？にきいたような」

「ははは、そんなことはないよ。ただ知っていることだ多いだけだ。」

「そーですか。それよりも今あいてます？」

「ああ、いま暇だけど？なんか手伝ってほしいのか？」

「はい。これなんですけど・・・・・」

「ふむふむ、ディアブロス亜種か、いいぞ」

「ほんとですか？ありがとうございます。一人はすこし不安で。」

「たしかにこいつ結構面倒だしな。じゃ、いくか。」

「はい！」

◆◆◆◆◆◆◆◆

砂漠

「あじぃ～・・・」

「あの、クーラードリンク飲まないんですか？」

「あ～だってあれ嫌いなんだもん。」

別に飲まなくても死なんし。　ん？あれは・・・

「おい、いたぞ。」

「え？あ、ほんとだ。」

ハンター移動中・・・・・・

「さて、どうする。」

俺らは今奴の後ろにいる。俺らにはきずいてない。バァカメ！

「う～ん、どうしましょうか。」

「あ～、じゃあ俺が仕掛けるから後ろからたたいてくれ。」

「わかりました。」

「じゃあいじゅぜ・・・・間違えた、行くぜ！」

どすん・・ドスン・・・

さてと、　ズラァ！
ドズン！！
「！？ぎゅあああああああああ」
こっち見たな、
「吹き飛べ！」
ズゴオオオオオオオン！俺の龍撃砲が火が噴く。だがこれは俺の黒炎で強化されているから威力が本来のものより倍増している。
「ゴオオオオオオオオオオオオオオ！？」
あ、もう頭壊れた。まあいい。
「いまだ！リオン！」
「はい！ハアアアアアア」
グシャア！
「ぐあああ」
今の一撃でディアブロスはよろける。
やっぱさっきのがかなり効いてるようだな。
「畳み掛けるぞ。」
「はい。」
リオンは次々と攻撃を決めてく。もう終わりにしようかな。

「とどめだぁ！」
ズガン、ドグシャア！
俺はそいつの腹をぶち抜き持ち上げる。
「ガ、グアァァァ・・・・・」
首がうなだれる。終わったか。
「よし、討伐完了だ・・・・なに驚いてんだ？」
「いやいや、持ち上げるとかすごい力ですね。」
「ん、まあな。とにかく帰るぞ。」
「は～い」
・・・・・やっぱ一人でするよりも楽しいな。

第5話

ぐちゃぐちゃ

肉を噛み切る音がする。

「ん、やっぱ黒龍の肉は変な味だな。」

え、いまどこにいるんですかって？飛んでます。まあ、走り食いしてるわけです、はい。

あれ？この場合飛び食いか？　まあいいや、どうでもいいし。

「にしても、最近ミラ種の依頼が減ったな。」

凄腕のハンターでもいるのだろうか。

「結局おれには敵わんか？」

ぶっちゃけルーツが複数来ても余裕でミンチにできるし。

この前なんて後ろから来たから尻尾で頭叩いたら、頭がパーンだもんな（笑）

そういえば、家のキッチンアイルーの給料出したっけ・・・・

忘れてた。帰ったら少し足しておこう。ちなみにアイルーたちは俺の正体を知っている。

「お、うまそうな竜発見。」

陸にディアブロスがいた。俺はそのまま急降下。

「ぐおおおおおおおおおお！！！」

「！？ぎゃあああああああ」

キィーーーン、ズドン

「グガ！？」

ほう、これで死なないか。結構強いかな？

「キ、キエェェェェェェェ」

咆哮など効かんわ。

「ゴアアアアア」

俺は尻尾を相手目掛けて振る

「！」

ヒュ

よけたか。いつもはこれで終わるが、これはすこしは遊べそうだ。とか言ってるうちに突進してきた。俺はそれを右から受け流す♪

〜　古すぎるなこのネタは。

ばさっ　ばさっ

俺は空に上がり、

ボンボンボンボンボンボオン

火球を連続で落とす。

「！　ぐ、お、ガアアアアアアア！」

その叫びとともにディアブロスが倒れる。

終わったかと近寄ってみるとまだ生きていた。虫の息だが。

「ちょっと試すか？」

と、おれはあるものを取り出す。

モドリ玉　　地面に投げつけ、緑の煙が出てきていつの間にかキャンプにいると言う謎のアイテム。

これをモンスターに使ったらどうなるのかと思った。

「それ」

ボフン！という音を立て煙が立ち上り、煙が晴れたところには、

裸の女性がいた。

第六話（前書き）

久しぶりの投稿です

第六話

・・・・・こんなことになるならモドリ玉何か使わなきゃよかった。

今俺は寝息をたてている元竜の女の子を足でつかみ、巣に向かっている。

「にしてもまさか竜が人になるなんてな・・・俺は別として。」

もともとおれは特殊なので完全に論外だ。
それにこいつどうしようか。責任とって俺が引き取るべきだろうか。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・

「スウゥ　スウゥ」

「早く起きないかな～」

おれはついさっき捕ってきたアプトノスの肉を貪りながらまだ寝ている女の子を見てる。
ちなみに全裸のままだとどんな反応されるかわからんので一応ボロい布をかぶせてる。

「う、ううん。」

「ん、起きたか？」

どうやら目が覚めたらしい。彼女は辺りをキョロキョロ見渡し、俺を見つけた瞬間怯えた目をした。

「た、たべないで・・・」

「は？」

食べられると思ったらしい。まあ、最初は食うのが目的だったけど人型を食うのにはどうにも抵抗がある。

「食わないから大丈夫だ。」

「ホント？」

「ほんと」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんとだ。」

「ほんとにほんとにほんと？」

「ほんとにほんとにほんとだ。」

このままだと無限ループに入る気がする。

「ほんとにｈ「ちなみにお前自分がどういう状態かわかってるのか？」ほえ？」

と首をかしげる少女。くっ、かわいいなこんちくしょう！

「どういう状態って・・・・・」

彼女はそう言って自分の体を見た瞬間硬直した。

「え、ええええええええええええええええ！！！！」

ぐお！？み、耳が・・・

「な、なんで！？どうして人間になってるの！？」

「お、落ち着け。」

「これで落ち着けと言われても無理よ！」

「今から説明してやるから一旦落ち着け。」

少年説明中・・・・・

「つまり人間たちが使う緑の煙が出る玉のせいでこうなったと。」

「そういうこと。」

「はあ、竜にも戻れないしどうしよう。」

「それなら方法があるぞ。」

「え、ほんと？」

「ああ、それはな、俺の血を飲むんだ。」

「なんで？」

「俺の血には特殊な力があってな、竜の力を活性化させることができる。だからそれなら戻れるんじゃないのか？」

「う～ん、やらないよりは断然ましね。」

「ちなみに、効果が現れるのは3ヶ月後だ。」

「遅！？」

たしかにな。自分でもそう思うよ。

「気長に待つしかないさ。」

「分かったわよ・・・でもその間面倒みてよ？」

「了解だ。」

第六話（後書き）

なかなかうまく書けない

復讐と断罪と追放（前書き）

久々のうpです

復讐と断罪と追放

シュレイド城・・・そこには人はいなく、黒龍のすみかとも言える。そして今ここでその黒龍が倒れんとしている。対峙するは混沌の龍、彼は自らを追放した一族への復讐を誓ったのだ。故に、相手が黒龍の種ならばたとえ相手が力無きものでも、平穏を愛するものだろうと容赦なく引き裂くだろう。

ＳＩＤＥテラ

俺が生まれてすぐのことだが、その頃は何の変哲もないただのミラボレアスだった。その頃は親にも可愛がってもらった。だけど、それから3年目経ったとき異変は起こった。黒いウロコの色徐々に変わっていき、目の色も赤くなっていった。

　おもえばそのときからかもしれない、俺の運命の歯車が狂ってしまったのは。その変化が起こってから親の反応もガラリと変わった。まだ声は理解できなかったが、気味悪がっていることは理解できた。まだ良かった、気味悪がられるだけならば、そしてほかの黒龍にもあったことがあるが皆俺を見る目は同じだった。そして俺は見たこともない場所に置き去りにされた。１０分待っても戻ってこない、３時間経っても戻ってこない、１日経っても戻ってこない、半月立っても戻ってこない。そして俺はとうとう理解した、俺は捨てられたのだと。

　いくつもの理由を仮定したがたどり着いたものは結局自分を嫌って捨てたということだった。そのときから俺の心には憎悪の炎が猛々しく燃え上がっていた。いまはいつもなら抑えられるようにはなったが実際にその姿を見ると衝動に負けてまうのだ。

そんなことをしても何にもならないことは分かっている。復讐も理不尽な八つ当たりも何も生まないことは分かっている。だが、頭で

理解しても本能がそれを許さない。

だから今こうして黒龍を殺めようとしているのだ、相手は俺を憎しみを込めた目で睨んでくるがそんなものどうってことはなかった。

自分の憎しみと比べると全然強くない。

「グオオ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

もう声すらほとんど出せていない、龍の体はもボロボロだった。右腕と左足の骨は砕け、翼は引きちぎられ、片目は潰されていた。本当ならもう死んでいる状態だ。それを気力だけで意識を保っているに過ぎないのだ。そんな必死にあがいている龍に彼が哀れみを持つわけもなく、その頭に無慈悲な腕は降りおろされた。

・・・

「帰ってきてたのにゃ？ご主人。」

「・・・ムサシか、ちょっくら黒龍刈りをな。」

ハンターの時の自宅に帰るとキッチンで食器を洗っているアイルー・ムサシがいた。

「にゃ〜・・・ご主人ここのところ機嫌悪いにゃ〜。」

「最近妙に黒龍種が増えてきてな、無償に腹が立つんだ。」

「それは仕方ないかもしれないにゃ、あとご主人にやられる龍に対してご愁傷さまなのにゃ。」

ちなみにこいつにはおれの過去を話した。

「そういえばこの前拾ったっていうディアブロスの女性はどうしたんにゃ？」

「あ～、約一ヶ月分の食料を置いて一回ハンターに戻ってくるって言っといた。」

「放置プレイですにゃ？」

「卑猥な表現になるからやめぃ。」

ズビシ！

「フニャ！？痛いにゃ・・・・」

おれはムサシにツッコミを軽くいれたつもりだったのだがかなり痛かったようだ。

「すまんすまん。」

こんなふうに笑って過ごすのもいいな、ほんと・・・・

「そういえばご主人、リオンっていうハンターしってるにゃ？」

「リオン？」

リオン・・・前にクエを手伝った娘か？

「知ってるな。」

「そのリオンって人が前に訪ねてきてにゃ？ご主人がどこにいるのか聞いてきたのにゃ。」

「？なんでだ？」

「たしか、師匠になって欲しいなとか言ってたにゃ。」

まじか、おれ教えるの苦手なんだが・・・

「・・・まあ、その件は後回しとして何か新しい情報あるか？」

こいつはキッチン猫兼情報屋をしているため俺はこいつに色々調べさせている。ちなみに報酬はマタタビだ。

「塔にルーツが複数いたらしいにゃ。」

珍しいな、あいつらが一箇所に集まるなんて。まあいい、

「何匹来ようが滅ぼすだけだ。」

それがおれの存在意義なのだから。

第9話

カツン・・・カツン・・・カツン・・・・

静寂の中に階段を登る音が響きわたる。

カツン・・・カツン・・・カツン・・・

階段を登るそれは黒い翼が着いた鎧を身に付け、一見なんの変哲のない太刀を背に携え只々上がっていく。

カツン・・・カツン・・・（ピタッ）。

音が止み、それ　ハンターはゆっくりと頂上の中心へと歩いていく。

空には塔を中心として円を書くように旋回している祖龍の群れ。

そんな誰もが恐怖する光景を前にそのハンターは顔に笑みを浮かべ静かに言い放つ。

「さあ・・・ショウタイムだ。」

塔の上で繰り広げられたもの、それは戦いではなくただの虐殺だった。
ハンターが太刀を振るうたびに一体、また一体と命を刈り取られていく。
その内の一体がハンターの腕をつかみ握りつぶそうとする。祖龍は勝ったと言わんばかりに笑うが、つかまれた当の本人はそんなことを気にも止めずに太刀を反対の手に持ち別の竜の心臓を突き刺し体から血飛沫を上げながら抉りとる。

そして小さく舌打ちをしたと思ったら、腕をつかんでいた竜は気が付けば空を飛んでいた。否、投げ飛ばされていた。何が起こったかわからない竜は戸惑っている間に背後を取られ首をはねとばされ落ちていく。

ハンターと祖龍たちが戦い始めて5分、十数体いた祖龍ももう残り3体になっていた。

とてもただの人間にできる行為ではなかった。そう、ただの人間だったなら・・・

SIDEテラ

「・・・他愛の無い。」

俺は積み重ねた死体の山に座ってタバコに火をつけながら呟く。だが、何度火をつけようとしてもつかなかった。よく見ると返り血が先端にべっとりと付着していた。

「っち、湿気てやがる。」

俺は血まみれのタバコを投げ捨て、箱から新しいのを出してくわえ、紫煙を吐き出す。

「一体いつになったらこいつら絶滅するんだ？」

俺は例外だがな。っつ！？

俺はつかまれた腕の鎧を取ってみると腕が青く変色していた。

「さすがに腐っても祖龍ってか？」

ご存知だと思うが、黒竜種はほかのモンスターと比べられないほどの力を持つ。中でも祖龍のような亜種は特に危険とされている。そんな竜に腕をつかまれたのだ。これで済んだのはまだましな方、本当ならばぐしゃぐしゃに握りつぶされているところだ。それを確認すると今度は胴の方を外した。そこには痛々しい風穴がぽっかりと腹に空いていた。

「・・・一体いつになったら治るんだ？これは。」

この傷は今回の戦闘で付いたものではなく、以前俺が竜の姿で狩りをしていたときにあるモンスターが付けた傷だ。そして、これまでこれ以外の重症は受けていない。

俺はその時のことを思い出す。初めて引き分けた時のことを・・・・

第9話　（後書き）

づがれだ〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6906s/

モンスターハンター　　孤独な強者

2011年9月21日01時57分発行